

## 205. 県境の遺跡

### 1. はじめに

今回取り上げる遺跡は、湖西北部の今津町北仰西海道遺跡と滋賀・福井両県との県境付近に位置する岐阜県揖斐郡藤橋村のはいづめ遺跡である。ともに縄文晩期中葉から後葉にかけての土器棺墓が検出され、植物質利用関係の石器が石器組成の上で重要な位置を占めており、なおかつ土器棺に使用される土器の形態が非常に類似し、晩期の後半において近畿・東海地方の中心部分とはやや違った文化的様相を示し、小地域色を呈していたと考えられる。

本稿では、これらの小地域を土器の形態、石器組成、土器棺墓などを通じて紹介し、近畿地方の縄文晩期後半における本地域の役割を示すこととする。

### 2. 遺跡の位置と立地（第1図）

北仰西海道遺跡は、滋賀県の北西部、琵琶湖西岸の高島郡今津町に位置する。同町は夏は海水浴、冬は遺跡の西3.8kmにある箱館山においてスキーでにぎわっている。遺跡は、この山の南側を流れる石田川が造り出す扇状地性の沖積平野に位置している。

はいづめ遺跡は岐阜県北部の旧徳山村に位置している。同村は揖斐川の最上流部にあり、周囲を1,000m以上の山で囲まれている。遺跡は同川の支流西谷川によ

って形成された河岸段丘上にある。

両遺跡は直線距離にして約47kmの位置にある。

### 3. 遺跡の概要

#### ①北仰西海道遺跡

五度の発掘調査が行われており、100基以上の土坑墓、96基の土器棺墓、数基の配石・集石遺構などが検出されている。これらのほとんどは滋賀里Ⅲ式以降のものである。石器には凹石類・石皿・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石錘・砥石などが出土しており、石製品や土製品には、石棒・石刀・石冠・耳栓・輪状土製品・有孔円盤などがある。

#### ②はいづめ遺跡

二度の発掘調査が行われ、住居跡3基、土器棺墓16基、土坑墓1基、配石・集石遺構が2基検出されている。これらはすべて晩期に属している。しかし、土器棺墓は住居跡より後に造られたようである。それらはいずれも、北仰西海道遺跡と同様で、稻荷山（滋賀里Ⅲ）式から馬見塚式までの晩期後半のものである。なお、1基のみ弥生前期の土器棺墓がある。石器には磨石・石皿・石鏃・石匙・削器・打製石斧・磨製石斧・楔形石器・石錘・砥石などが出土しており、石製品には石棒・石刀・石冠などがある。

### 4. 土器における特徴

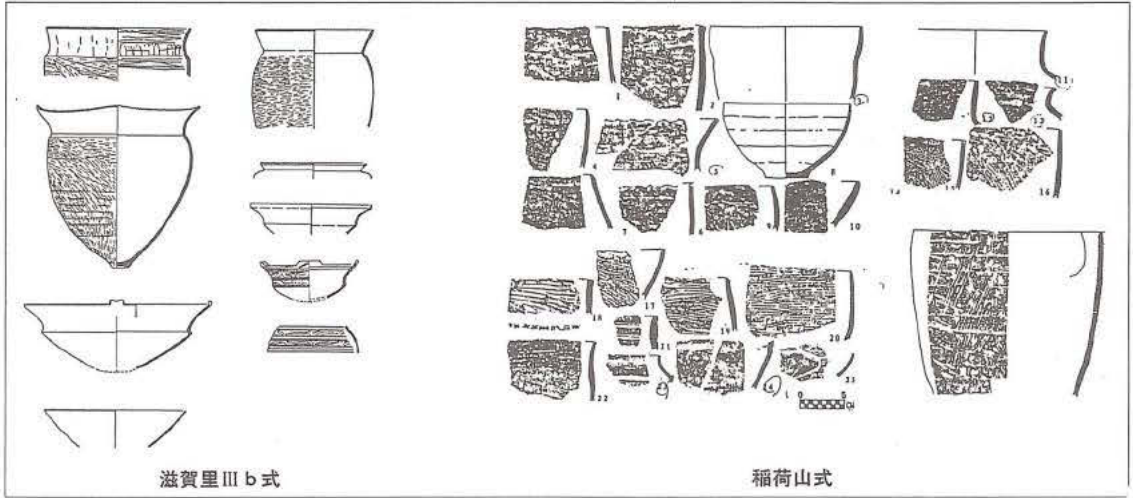
両遺跡から出土する土器は、器形、調整が近畿・東海地方の中心的土器とは違い非常に特徴的な土器である。このうち全体のプロポーションが判るものは、ほぼ土器棺に限られる。

近畿の中心（河内・摂津など）部分では、頸部で「く」の字にくびれて外反する口縁部に小さな凹底をもつ形態と外面調整に削りが多用される滋賀里Ⅲb式の典型例が分布し、東海では滋賀里Ⅲb式的な土器に砲弾形の器形をもち二枚貝条痕がある土器の稻荷山式が分布している（第2図）。

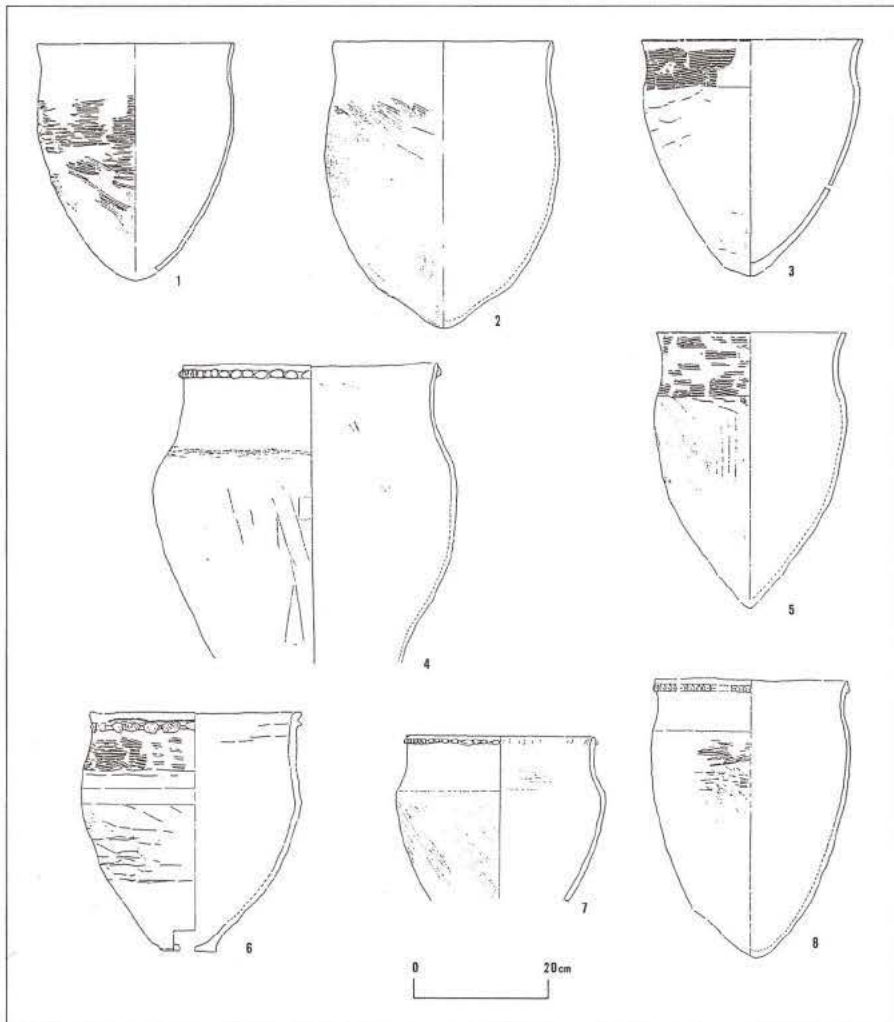
これらの土器に対して両遺跡出土の土器は、頸部で緩やかにくびれて外反する口縁部をもち、肩は張らず尖底の底部に向かってすぼまる器形を呈している。さらに、外面体部大半の調整は、滋賀里Ⅲ式や稻荷山式に通例の二枚貝条痕や削り調整ではなく、棒状工具・



第1図 遺跡の位置



第2図 滋賀里III b式・稲荷山式実測図（註③・④の文献より一部改変）



第3図 はいづめ遺跡出土遺物実測図

植物繊維のようなもの<sup>(9)</sup>による条痕調整(第3図)であり、なおかつ色調が橙色系であるという特徴をもっている。器形、調整、色調の3点がセットとなって、『北仰・はいづめタイプ』ともいべき滋賀里Ⅲ式・稲荷山式の小地域色として捉えることができる。このうち底部尖底は、従来滋賀里Ⅳ式になって完成されるものとされており、さらに、最近の家根氏による滋賀里Ⅲb式の細分案では、底部尖底の深鉢は最も新しい段階に位置づけられている。

この基準に照らし合わせると『北仰・はいづめタイプ』の土器は、滋賀里Ⅲ式の最も新しい段階の土器ということになる。しかし、上述の特徴を備えた底部凹底の土器が存在しない点から近畿の中心部よりいち早く底部尖底化されると考えたい。今後、現実にはないのか、資料の増加をまって再度検討していく必要がある。

滋賀里Ⅲ式・稲荷山式以降の土器についてみれば、船橋式・五貫森式の段階までは、形態的にやや違いをもつものの調整や底部が尖底である点で、依然として小地域色を堅持している。しかし、長原・馬見塚式段階になると北仰西海道遺跡では前段階の伝統を引いているのに対して、はいづめ遺跡では、幅の広い凸帯が口縁端部よりやや下がった位置につき、二枚貝による間延びしたO字の刻み目をもつ馬見塚式の典型的な土器が成立し、土器の上では違う様相をみせている。

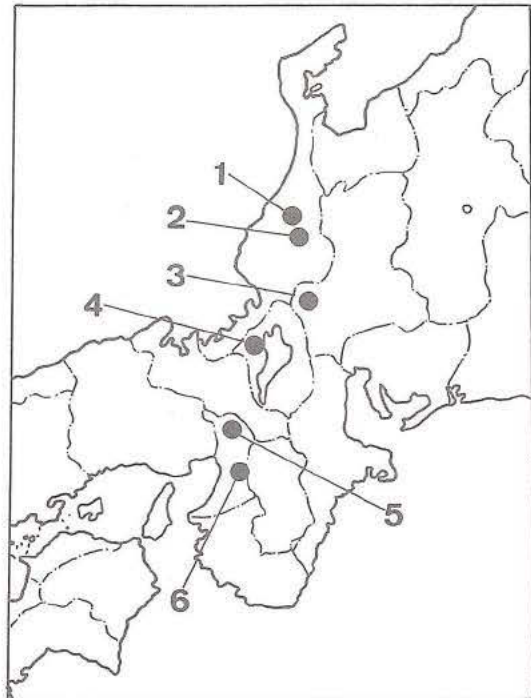
## 5. 石器組成

両遺跡とも若干、前後の時期の石器を含む可能性があるものの、基本的には晩期後半の墓地に廃棄・遺棄された石器の組成を反映しているといえる。北陸と近畿(滋賀里Ⅲ式・中屋式期)の墓地遺跡の石器組成と比較しながら特徴を抽出していきたい。

比較対象とする遺跡は、石川県御所の館遺跡・福岡遺跡、大阪府耳原遺跡・日下遺跡である(第4図)。それぞれの遺跡の石器組成を表にしたのがこの第1表である。

この表をみれば、北仰西海道遺跡では、植物質利用関係の凹石類が5割弱を示しており、さらに石皿・打製石斧の割合を加えれば5割を若干越える。狩猟関係の石鏃は個別項目では2番目の4割弱を占めており、これらの石器だけで8割5分以上を示しており、石器組成より植物利用を中心に狩猟もバランス良く行われていたことが読み取れる。

はいづめ遺跡は凹石類が8割強で、他の石器類を圧倒している。第2番目は打製石斧で1割弱を示し、狩猟関係の石鏃・石槍、漁業関係の石鏢はそれぞれ5分かそれにも満たない。北仰西海道遺跡と比べれば植物質利用関係の凹石類の比重が、狩猟・漁業関係に対し



第4図 石器組成比較遺跡位置図

(1:福岡遺跡 2:御所の館遺跡 3:はいづめ遺跡  
4:北仰西海道遺跡 5:耳原遺跡 6:日下遺跡)

遺跡名	漁業				植物利用or工具		狩猟		工具		合計
	石鏢	打製石斧	凹石類	石皿	石鏃	尖頭器	磨製石斧	その他			
北仰西海道	—	12	108	2	90	—	16	10	238		
	—	5	45.4	0.9	37.8	—	6.7	4.2	100%		
はいづめ	6	64	633	—	30	10	11	11	765		
	0.8	8.4	82.8	—	3.9	1.3	1.4	1.3	100%		
福岡	1	165	230	77	11	—	15	3	502		
	0.2	32.9	45.8	15.3	2.2	—	3	0.6	100%		
御所の館	3	35	10	1	—	—	2	—	51		
	5.9	68.6	19.6	2	—	—	3.9	—	100%		
耳原	—	—	1	—	60	—	1	6	68		
	—	—	1.5	—	88.2	—	1.5	8.8	100%		
日下(S57年度)	—	—	2	—	86	—	—	4	92		
	—	—	2.2	—	93.5	—	—	4.3	100%		

第1表 各遺跡の石器組成

てかなりのウエートを占めているといえる。

より北の石川県に位置する福岡・御所の館遺跡の組成をみれば、前者では凹石類が4割強を示し、第2番目の打製石斧が3割強で、石皿（15.3%）を加えれば全体の9割4分を示し、はいづめ遺跡の傾向と類似する。ただ、打製石斧の割合はいづめ遺跡より多くなっている。これらの傾向は御所の館遺跡でも追認できる。

目を西に移し耳原遺跡と日下遺跡をみることにする。耳原遺跡では、狩猟関係の石鏃が9割と他を圧倒している。日下遺跡（昭和57年度調査分）でも耳原遺跡と同様な結果が得られる。

数遺跡の墓地遺跡の石器組成を比較した結果より得られたことをまとめていけば、『北仰・はいづめ』文化圏では、植物質利用の凹石類が多く、植物質類の利用が生業で最も重要なウエートを示していると考えられる。北仰西海道遺跡では狩猟関係の石鏃も4割弱と多く、さらに布留遺跡で可能性の指摘がなされているように漁業にも使われた可能性があり、植物質利用・狩猟・漁業をバランスよく行っていたことが推定できる。また、植物質利用関係の石器の組成の割合の高い北陸と狩猟関係の石器の割合の高い近畿中心部分との中間的石器組成を示している。さらに北陸にいくほど打製石斧の割合が増加していることが指摘できる。

## 6. 土器棺墓について

北仰西海道・はいづめ遺跡の遺構は墓地が中心であり、はいづめ遺跡ではその9割までが土器棺墓である。現状で、筆者がどのような方向から分析していいのかわかぬ土坑墓はひとまず置き、地域的傾向がでている土器棺墓に絞って紹介していく。

北仰西海道・はいづめ遺跡の土器棺墓は、その土器型式から滋賀里Ⅲ式・稲荷山から長原・馬見塚式の間に構築されており、北仰西海道遺跡では96基、はいづめ遺跡では16基（弥生前期1基含む）が検出されている。これを個別時期ごとにみれば以下ようになる。北仰西海道遺跡は概要報告書によれば、時期の判る70基のうち滋賀里Ⅲ式が46基、滋賀里Ⅳ式が18基、船橋・長原式が6基となっており時期が新しくなるにつれて減少している。はいづめ遺跡では、稲荷山式が5基、五貫森式が3基、馬見塚式が3基、不明が4基であり、稲荷山式から後の時期に向けて漸移的に少なくなっているが、北仰西海道遺跡ほどの大きな変化は認められない。しかし旧稿で指摘した滋賀里Ⅲ式から長原式まで継続して営まれる墓地でも滋賀里Ⅳ式段階の土器棺墓が一旦姿を消し、再び船橋・長原式段階になって姿を表す現象が同遺跡でも認められる。ここに近畿地方

北仰西海道遺跡

	直立	横位	計
滋賀里Ⅲ式	5	44	49
滋賀里Ⅳ式	—	18	18
船橋・長原式	—	6	6
計	5	68	73

斜位は、横位に含めた。

はいづめ遺跡

	直立	横位	計
稲荷山式	—	5	5
西之山式	—	—	—
五貫森式	—	3	3
馬見塚式	—	3	3
計	—	11	11

第2表 埋設方法一覧

北仰西海道遺跡

	単棺	合蓋	合口	計
滋賀里Ⅲ式	8	25	13	46
滋賀里Ⅳ式	5	6	7	18
船橋・長原式	4	1	2	7
計	17	32	22	71

はいづめ遺跡

	単棺	合蓋	合口	計
稲荷山式	1	1	3	5
西之山式	—	—	—	—
五貫森式	1	1	1	3
馬見塚式	2	1	—	3
計	4	3	4	11

第3表 土器棺使用法一覧

の各墓地遺跡と同様に西からの新しい文化の流入の影響を受けていると考えられる。次に土器棺墓の埋設方法についてみていく。第2表はそれぞれの遺跡の細別時期ごとの推移である。北仰西海道遺跡では、直立は滋賀里Ⅲ式のみに限られている。その他は横位のものばかりである。はいづめ遺跡でも時期不明の土器に直立が認められるものの大半は横位である。基本的には両遺跡とも同一の歩調をもっている。これらの傾向は、近畿・北陸の土器棺墓でも認められる。

合わせ口や単棺といった土器棺の使用法を表にしたのが第3表である。

北仰西海道遺跡では、滋賀里Ⅲ式から船橋・長原式まで合わせ口棺・合蓋棺・単棺など各時期通じてある。はいづめ遺跡では時期の確実にわかるものでは、稲荷山～五貫森段階では、各組合せが存在している。しかし、馬見塚式段階では合わせ蓋と単棺のみである。晩期後半の合わせ口土器棺は、近畿地方では京都府中臣遺跡を西限とし、東は東海、北は石川県にまで及んでいる。滋賀里Ⅲ式・中屋式・稲荷式段階に限ってみれば、合わせ口棺は、滋賀県の北部から北陸にかけての地域にその分布の中心がある。石川県での分布を山本直人氏の分布図を参考にみれば、近畿より近い加賀市の横北遺跡や手取川の流域の御所の館遺跡のみで、それより北では認められていない。

## 7. まとめ

滋賀・岐阜・福井の県境近くの北仰西海道遺跡・はいづめ遺跡について土器の特徴・石器組成・土器棺墓の特徴を紹介してきた。ここでは紹介してきたことをまとめながら近畿の晩期後半の文化を考えるうえで本地域のもつ意義を考えたい。

北仰西海道・はいづめ遺跡がある地域では、滋賀里遺跡Ⅲ式・稻荷山式段階から土器棺墓の群集化が認められ晩期の最終末まで継続的に営まれている。近畿・北陸で滋賀里Ⅲ式・中屋式期に出現する土器棺再葬墓について、前稿では、近畿地方が同一墓地内で縮小しながらも後の時期の土器棺墓があることから近畿地方で成立したとした。こうした集団墓ともいべき大規模な土器棺再葬墓の成立した背景には、藤本強氏が「安定した1年周期の生業をもつこと、定住もしくは季節的な定住が必要条件であったと考えられる一中略一こうした条件を満たすには多くの地域で農耕が出現することが必要であり、それ以外の場合には恵まれた自然環境がこうした条件を満たすごく特殊な例であったものと考えられる。」と述べられているように管理栽培も含めた高度な植物質利用があることが想定できる。これは両遺跡において見られた石器組成での凹石類の卓越からも裏付けられ、石鏟が組成の主体を占める河内・摂津に比べて土器棺再葬墓の成立地の可能性が高い。

土器についてみれば特徴的な土器が成立し、底部の尖底化は近畿地方の中心部分よりいち早く達成されており、滋賀里Ⅲ式段階で土器棺再葬墓の成立とともに近畿地方のイニシアチブをとっていたものと思われる。こうした小地域色も墓制の上では晩期の最終末まで同様の歩調を示すが、土器の上では船橋・五貫森式段階で土器に若干の違いをみせ、長原・馬見塚式段階では、北仰西海道遺跡は独自の方向性をもち、はいづめ遺跡は東海地方に組み込まれてしまう。

本稿の土器部分の観察は数年前に行った観察結果を基にした。その際、北仰西海道遺跡については滋賀県今津町教育委員会葛原秀雄氏、はいづめ遺跡については岐阜県教育委員会大熊厚志氏にお世話になった。記してお礼としたい。

(中村健二)

## 註

- ① 葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第3集 1984 今津町教育委員会、葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第4集 1985 今津町教育委員会、葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第5集 1986 今津町教育委員会、葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第7集 1987 今津町教育委員会、葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町内遺跡発掘調査概要報告書

(北仰西海道遺財調跡ほか)』1988 今津町教育委員会

- ② 大参義一編『はいづめ遺跡』岐阜県教育委員会 1989
- ③ 家根祥多「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4:縄文土器Ⅱ) 1981
- ④ 増子康真『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』1985
- ⑤ 厳密な工具の検討は行っていない。
- ⑥ 滋賀県と岐阜県、福井県との県境のみに分布しているようである。
- ⑦ 註③とおなじ。
- ⑧ 家根祥多「西日本地区」『シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』1990 山梨考古学会
- ⑨ いずれの土器も底部尖底であり、船橋式・五貫森式の典型例とは違いをみせている。
- ⑩ 北仰西海道遺跡の土器は2条凸帯文で、はいづめ遺跡の土器は1条凸帯文である。
- ⑪ 石器組成を比較対象する遺跡は、若干の混じりはあるものの晩期石器が抽出できるものとした。
- ⑫ 平田天秋『尾口村 御所の館遺跡』石川県教育委員会 1975
- ⑬ 山本直人編『福岡遺跡』石川県福岡村教育委員会 1987
- ⑭ 奥井哲秀『耳原遺跡発掘調査概報』茨木市教育委員会 1981
- ⑮ 吉村博恵「日下遺跡の調査」『日下・千手寺遺跡発掘調査概要』東大阪教育委員会 1983
- ⑯ 同遺跡の正確な石器の点数はでていない。したがって、本文中の記載と写真より点数を算出した。
- ⑰ 北村博義『布留遺跡布留(堂垣内)地区縄文時代の出土石器』埋蔵文化財天理教調査団 1987
- ⑱ 葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第7集 今津町教育委員会 1987
- ⑲ 拙稿「近畿地方縄文晩期の墓制について」『古代文化』第63巻第1号 1991
- ⑳ 稲作などの新しい要素を携えた文化。
- ㉑ 北仰西海道遺跡では、直立は滋賀里Ⅲ式のものに限られており、はいづめ遺跡でも同様な時期であると想定できる。
- ㉒ 山本直人「石川県の土器棺」『福岡遺跡』石川県福岡村教育委員会 1988
- ㉓ 註⑱に同じ。
- ㉔ 藤本強「墓制成立の背景」(『縄文文化の研究』9、精神文化) 1983

## 206. 中世の物指が出土

### 長浜市今川東遺跡

平成3年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査で、長浜市今川町字池殿所在の今川東遺跡から14世紀初頭頃の物指が出土していたことが明らかになった。物指の出土は他に草津市矢倉口遺跡出土の9世紀中葉から末のもの、米原町殿屋敷遺跡の鎌倉から南北朝期のものがあり、県内3例目である。

今川東遺跡の物指は最大幅2.0cm、同厚0.7cm、残存長17.1cmで、ヒノキ属の板材を丁寧に削り加工している。その片面には端部から3.5～3.6cmごとに幅いっぱい一寸の目盛を刻み、その中間にも幅の約3分の1にわたって五分の目盛を刻んでいる。墨のにじんでいる目盛があることから、鑿状工具で刻んだあとに墨をうったものであることがうかがえる。

物指や木片に墨をうった物指状木製品は多く出土しているが、当遺跡出土の物指と似通ったものとして京都市仁和寺南院跡出土の物指がある。これは、平安時代後期と時期は遡るものの一尺物指の完形品であり、このことや作りの形態などを考えると、今川東遺跡出土の物指も一尺のものであった可能性が高い。

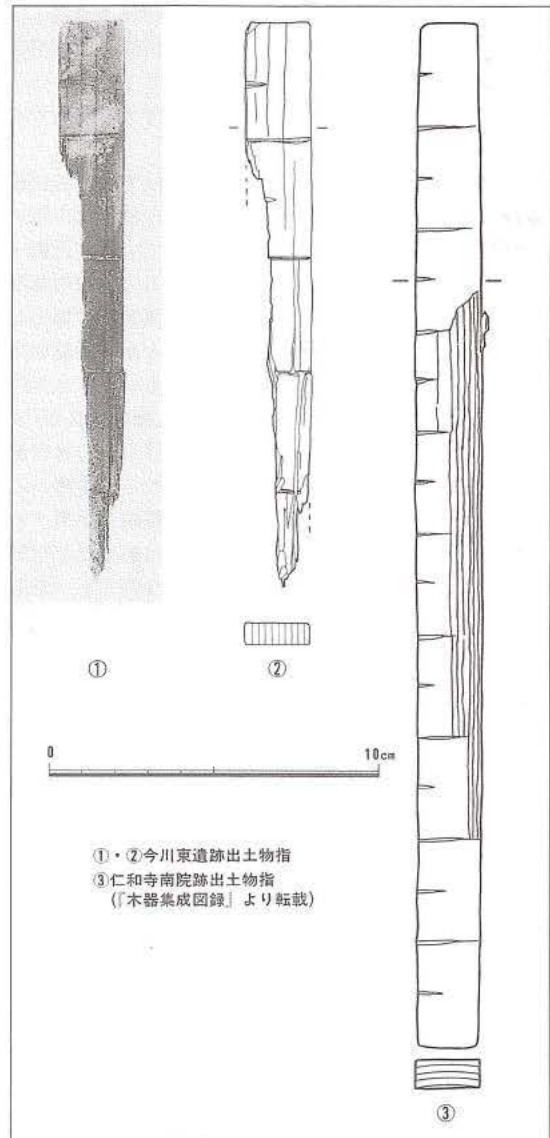
この物指は一寸が3.5～3.6cmと現在の曲尺に比べるとやや長くなっている。これは曲尺一寸の1.2倍であり、一尺が曲尺の一尺二寸の「大たかはかり」という、のちに「呉服尺」と呼ばれる物指に比定できる。呉服尺の名が示すように、これは衣類製造専用の職能尺として民間に始まったものとされている。

この物指は、下駄、漆塗り椀、杓子、箸状木製品などと共に出土していることから、当時の人々の生活に活づく尺度を知りえる貴重な資料であるといえる。

(大崎 康文)

#### 註

- ① 同一遺構内から出土した青磁双魚文盤から時期を判断した。
- ② 京都市埋蔵文化財研究所「京都市内遺跡試掘立会調査概法」1983



①・②今川東遺跡出土物指  
③仁和寺南院跡出土物指  
〔木器集成図録〕より転載

同『平安京跡発掘資料選(二)』1986

#### 参考文献

- 『ものと人間の文化史22 ものさし』  
小泉けさ勝 法政大学出版局 1977



今川遺跡位置図(国土地理院発行 25,000:1)